

「一」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

北海道では、五月の風を馬糞風^{ふん}という。馬の糞さえふきとばすかわいた強い風。まだ至るところ土の道ばかりの時代のこと、風にまいあげられた土ぼこりは残雪に付着して、茶色の雪だるまがそこそこにあるようなのが、北の国の五月の風景。そして、青空、黒土、生まれたばかりの緑、そこらじゅうに黄色いボタンをまき散らしたようなたんぽぽ、クローバーの白、桜の淡紅^{たん}、色彩^{さい}と光のこう水の中で風景がかがやきはじめる。そんな五歳^{さい}の春、私たち家族は函館^{はこだて}に引っこしてきた。

父は銀行員で、いつも帰りはおそかったが、気まぐれにおもちゃやケーキを買ってきては夜中に子どもたちを起こした(ケーキなどめったに食べることのないころのお話です)。ある日、父は赤いかわぐつを買ってきた。素足にゴムぐつか下駄^{げた}がそのころの子どものいっぱんなはきものだった。足の甲^{こう}のところにバレエシューズのように細いストラップのあるきゃしゃでスマートな赤いくつ——長ぐつをはいてだぼだぼと走りまわっている野ザルのような我が身をすっかり忘れ、気分はもう小公女かマンガの主人公。ゴムぐつの中でカポカポと音をたてて歩く妹に比べてなんて優雅^{えいげ}で美しい私の足もと！ 毎日家の中ではいて雪解けを待ったが、がまんしきれなくなったある日、しめった黒土とかわいた茶土でまだらの道にとびだしていった。つくしやたんぽぽをつんで野原を走りまわり、残雪のかたまりをけったり登ったり破かいしたりが遊びだったから、かわぐつのつま先部分はあつというまにはげてしまった。父はだまって赤いクレヨン^{問二}をぬってくれた。

私は五歳で、とくに幼稚園^{幼稚園}に行ってもいい年れいだったが、引っこしてきたときは入園時期が過ぎていた。来年入園すればいいさ、父も母も、町も時代も、のんきだった。

家のすぐ前は坂道で、子どもの足で二十歩ものぼれば公園の入口、そこには池や動物園もあった。父の腰^{こし}は私の背たけよりもまだ高く、私はペンギンの子どものようにトタトタと、その長い足にまわりつくようにして歩

いた。父の歩き方はとても速く、小走りでがんばってもしまいは父の背中ばかりみつめながら、必死で走っていた。子どもは大きな木をみつけると、すぐに足場をさがしてのぼりたがり、ブロックや木の塀に出会うとすぐその上をサーカスのつなわたりの格好して歩きたがった。父はそんな私を無言で見ている、あぶなっかしいしゅん間にだけでをのぼした。

日曜日はおとうさんとクマを見に行く。ボートのこぎ方をおしえてもらえる。たんぼの首かざりの作り方をおしえてくれたのも父だった。

問三

わたあめの雲といちめんのたんぼの原っぱを舞台にした父との日々、五歳の五月は永遠にあるようだった。

夏、はじまったばかりの私の記おくから、とつ然父が消える。朝起きて父の写真をもって泣くのが私の日課になった。

「おとうちゃんに会いたいよお。おどーちゃん、おどーちゃん」

一日をどう過ごしたのかを思い出せないが、私はこのときの自分の泣き声を覚えている。そして、夕方になるとまた大声をあげて泣いた。^{問四}西の窓辺に、父の背たけくらいあるヒマワリが、すさまじい赤を背景に黒いガイコツのように風にゆれていた。ずっと後で知ったのだが、父は胸の病気で遠くの病院に入院していたのだ。

私には母と寝た記おくがない。年子で妹が生まれてから、私は父の大きな背中にほっぺをおしつけて寝ていた。肩はば分のふとんのすきまの寒さや、大木のセミのようにうまく密着できたときのぬくもりやにおいは、私にとって姿形でない父の存在感だった。そしてその形でないものさえも、私ののはじまったばかりの人生からある日消えたのだ。その夏から次の夏まで、私の風景に赤以外に思い出せる色がない。^{問五}私はだんだん小さくみすぼらしくなってゆくくつのつま先をひとりでぬりつぶす、赤いクレヨンで。

新しい春がきて、私は坂の上の公園のむこうの幼稚園に入った。仏教系の有名私立の幼稚園で、みんな三歳か

ら入園していた。

「年長さんなんだからしっかりね。ごあいさつちゃんとするのよ」

問六

ふだんしたこともないごあいさつなんかできるはずがない。それまでもつれ放題だった肩の下まである長い髪を、母が毎朝くしですいて三つあみを作る。ゴムで束ねるときの痛さで朝から泣き通しの私。入園式でも最初から最後まで大きな体でひとり泣きさけんでいた。次の日から祖父が送りむかえをした。母は妹と祖母の世話と夫不在の家を守るのに必死だったのかもしれないが、私は母とあの坂道を歩いたのだろうか。

この坂はおとうさんと登る坂。この公園はおとうさんと遊ぶ所。そして幼稚園への道は銀行に向かう道。この道のどこで父の背中を見送ったっけ。もう何日もおとうさんの背中に会ってない。私は毎朝玄関の柱にしがみついて登園をきよ否した。祖父がなみだと鼻水でぐじゃぐじゃになった私を柱からひっぱがし強引に坂道を歩かせる。ほおにいく筋ものなみだのあとをつけて胸から大きな名前入りのハンカチをぶらさげて、笑わない子どもが行く。祖父の手は道ばたでたんぼぼをつんではくれない。色彩のない春の道、無彩色の子どもが行く。^{問七}もう赤とはいえない、かわぐつともいえない小さな物体が玄関にうずくまっていた。

一ヵ月後、子どもは幼稚園をやめた。再び家の周辺で、もつれ髪のまま毛系のパンツをはいて妹とふたりで遊ぶ日々。ある日神社の探険の帰り道、保育園をみつめた。^{問九a}ジャングルジムやブランコに大小さまざまな子どもたちがサルのようにむらがっていた。二人は、エヘエへと笑いながら少しづつ近づいていき、毎日そこに入出入りしているうちにいつのまにか保育園の子どもになっていた。

八月、父は退院した。「不在」という存在で父を感じるようになってしまった子どもは、その日を覚えていない。退院と同時に札幌への転勤が決まり、家はにわかにあわたしくなった。^{問九b}私はひとりで保育園にお別れのあいさつをしに行った。休んだ妹の上ばきやお道具をちゃんと持ってきたのに自分のものはすべて忘れてきた。

庭のヒマワリに色がもどっていた。つかれた夏の残がいが首を垂れてすまなそうにつっ立っていた。

病みあがりの父は、公園にも動物園にも行くことはなくなり、前よりいっそう静かな人になって絵ばかり描いていた。そして私は、そのほどよいキョリの父の後姿をずっとみつめつづけていた。

父は、停年を待たずに銀行をやめて絵描きになり、晩年はガンさえ静かに受け止めていつもキャンパスのむこう側に遠い視線を向けていた。

外出もままならない限られた日々の中、最後の誕生日に父は赤いセーターが欲しい、と言った。私は贈る。

銀色の巻き毛、白蠟はくろうの老画家に深紅しんくのセーターはみごとに美しく――、やがてひつぎの中で、白い花々でうめつくされていった父と私の赤。

父が逝って三年、気がつくとき、私は背中ばかりをみつめる自分の眼から、解放されていた。

(いせひでこ『七つめの絵の具』)

〈注〉白蠟：白色のろう

問一 ―― 部「赤いかわぐつ」とありますが、「赤いかわぐつ」は「私」の目にどのように映りましたか。

- 1 ゴムぐつで走りまわるみっともない妹とはちがって自分にふさわしいもの
- 2 現実とは異なる上品で美しい夢の世界に自分を運んでくれるもの
- 3 いよいよほんとうの優雅な自分になれることをかたく約束してくれるもの
- 4 妹よりも自分をとりわけ大事にしてくれる父の深い愛情を表すもの

問二 ―― 部「父はだまって赤いクレヨンをぬってくれた」とありますが、このときの「父」を筆者はどのように見ていますか。

- 1 まだ残っている白い雪の上をどうしても赤いかわぐつで走ってみたいと思った「私」のするどい色彩感覚に気づき、さりげなく才能をのぼそうとしている
- 2 近所の子がだれもはいていないめずらしい赤いかわぐつをはやくみんなに見せたかった「私」の思いを知って、いとおしく感じている
- 3 特別な赤いかわぐつを日用のゴムぐつのようにはいて自由に走りまわりたいという「私」のよろこびようを見て、ゆかいな気分になっている
- 4 自分が贈った赤いかわぐつをはく日が待ちきれず雪の残る道ではしゃぎまわっていた「私」の気持を受け止めて、やさしくつつみこんでいる

問三 ―― 部「五歳の五月は永遠にあるようだった」について答えなさい。

- ① 「五歳の五月は永遠にある」と感じたときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。
- 1 どんな時も父がいっしょにいて自分を守ってくれているという安心感で心が満たされている
 - 2 父といっしょにいるのがあまりにも楽しいのでまたたく間に時間が過ぎていくように感じている
 - 3 楽しく父といっしょに遊んだ数々の記おくをいつまでも忘れることはないだろうと思っている
 - 4 父がいっしょにいてくれるのでいつまで遊んでいてもかまわないという開放感にあふれている

② この部分はこの文章の中でどのような効果をあげていますか。

- 1 赤いかわぐつの似合う優雅な少女になりきれない「私」を示す効果
- 2 父が子どもを喜ばせる才能にたけていることを印象づける効果
- 3 色彩にあふれかがやくように美しい北海道の五月を強調する効果
- 4 父と過ごす大事な時間がやがてとぎれてしまうことを暗示する効果

問四 — 部「西の窓辺に、父の背たけくらいあるヒマワリが、すさまじい赤を背景に黒いガイコツのように風にゆれていた」という一文はどのようなことを表していますか。

- 1 かわいがってくれた父がとつ然「私」を見捨ててしまったことに、さびしいあきらめを感じていること
- 2 子ども心にも父に何かあったのではないかとびん感に感じ取り、父の身を心配しはじめていること
- 3 父をはげしく求める心の中に、かけがえのない父がとつ然いなくなった強い不安や恐怖があること
- 4 急にいなくなった父をうらみ、いっそ父を心の中からほうむり去りたいという気持が生じていること

問五 — 部「私はだんだん小さくみすぼらしくなってゆくくつのつま先をひとりでぬりつぶす、赤いクレヨンで」とありますが、このときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 父のかわりに自分が赤いクレヨンでくつをぬることを通して、父の不在という厳しい現実を必死で受け入れようとしている
- 2 大好きな父がくれた赤いかわぐつをはき優雅な少女気取りになっていた自分を再び取りもどそうと、やっきになっている
- 3 父と過ごした日々に味わったいきいきとした感情が記おくの中でしだいにうすれてゆくので、父の存在を確かめ失うまいとしている
- 4 心をこめてくつをぬることで、大好きな父が帰ってきたときにきれいなくつを見て喜んでくれるように努めている

問六 — 部「それまでもつれ放題だった肩の下まである長い髪を、母が毎朝くしですいて三つあみを作る。

ゴムで束ねるときの痛さで朝から泣き通しの私」とありますが、このときの「痛さ」には「私」のどのような気持が表れていますか。

- 1 父に守られてのびのびと過ごしていた世界から、父がいらない上にこれまでとちがいきちんとしなければならない世界に入ったつらい気持
- 2 「私」をのびのびとさせないで小さな身なりの乱れもただす厳しい母のしつけが息苦しく、にげ出したという気持
- 3 新しく入った幼稚園は規則が厳しくて「私」には向いておらず、父ならこんな幼稚園は選ばなかっただろうというくやしい気持
- 4 きれいな三つあみを編める友だちと同じように、自分で髪を整える習慣をつけてくれなかった母へのうらみがましい気持

問七 — 部「無彩色の子ども」とありますが、この部分はどのような「私」を表していますか。

- 1 幼稚園では友だちでもできず先生にもなじめず、少しも楽しくないのに、毎日家族にうながされてだせいで通っている無気力な「私」
- 2 父がいなくなつて心が満たされず、何を見ても聞いても心にひびかなくなり、もはや自分でも何も感じようとしなくなつて「私」
- 3 夏の強い日ざしはすべての草花をからしてしまうので、五月とちがっていきいきとした色彩のない風景をつまらなく感じている「私」
- 4 父がいないので絵をおしえてくれる人もなく、父にもらった色とりどりのクレヨンを使って絵を描くこともすっかり忘れてしまった「私」

問八

——部「もう赤とはいえない、かわぐつともいえない小さな物体が玄関にうずくまっていた」という一文はどのようなことを表していますか。

- 1 くつが持っていた父からの贈り物という意味合いが消えそうなほど父とはなれている時間が長くなり、父がいなくなったという事実と傷が心の底に動かしがたく固まっていること
- 2 父がいなくなったのには事情があるのだと自分に言い聞かせてみても、父をしたう気持ちがだんだんうすれてくるにつれ、父のくれたくつも価値のないものに見えはじめてきていること
- 3 父が消えたしょうげきあまりに強かったので、父のくれた大切なくつに対する愛着までもがどこかへ行ってしまい、晴らしようのない悲しみが心の片すみに暗くよんでいること
- 4 何もかもががやいて見えた去年の五月がどうしても忘れられず、自分を見捨ててとつ然いなくなってしまう父をうらめしく思う気持ちが心の底にもやもやとわだかまっていること

問九

「二人は、エヘエへと笑いながら少しずつ近づいていき、毎日そこに入出入りしているうちにいつのまにか保育園の子どもになっていた」(——部a)と「私はひとりで保育園にお別れのあいさつをしに行った」(——部b)からどのようなことがわかりますか。

- 1 父のことを忘れられる世界で過ごすうちにいつのまにか心の中から父の姿が消えていき、傷がいやされていったこと
- 2 父がいなくなって家事でいそがしい母に代わり妹の世話をしているうちに、自然に姉としての自覚がはぐくまれていったこと
- 3 保育園でいろいろな子どもたちといっしょに生活している中で、あいさつをする習慣がしっかりと身についたこと
- 4 父がいらない生活の中でも新たにのびのびと自分らしくふるまえる世界を見つけ、自分で行動するようになったこと

問十

——部「庭のヒマワリに色がもどっていた。つかれた夏の残がい首を垂れてすまなそうにつっ立っていた」とありますが、この部分はどのようなことを表していますか。

- 1 父が不在であった心細さが消え去り、もとのとおりおだやかな時間がもどってきたこと
- 2 父が帰ってきて私の心に安心感がもどった一方、父も自分も以前とは変化していること
- 3 転勤で娘たちが保育園生活を続けられなくなり、父が少し申しわけなく思っていること
- 4 父の退院でひとまず安心して家が活気づいた一方、父の体が完全には回復しなかったこと

問十一

——部「そのほどよいキョリの父の後姿をずっとみつめつづけていた」ときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 父の不在になれてしまった自分を自覚したので、あえて少し父にあまえるようにして過ごしている
- 2 以前のような密着した関係ではないが、そばにいる父の存在を絶えず静かに確かめながら生きている
- 3 せっかくもどってきた父との関係をこわしたくなくて、父の様子をうかがい遠りょしながら生きている
- 4 以前とはすっかり変わった父の姿を悲しく思うが、病弱な父をやさしく気づかいながら過ごしている

問十二

——部「やがてひつぎの中で、白い花々でうめつくされていった父と私の赤」とありますが、この部分はどのようなことを表していますか。

- 1 父と私の世界は永遠に美しく、私の中に閉じこめることでかがやき続けるということ
- 2 万能だった父がこの世を去り、二人だけのうるおいに満ちた思い出を持ち去っていったこと
- 3 うるおいに満ちた父と私の心地よい日々は終わり、二度ともどってはこないということ
- 4 父と私の二人の世界が、最も美しいかがやきを放ったと同時に終わりを告げていること

問十三 部「私は背中ばかりをみつめる自分の眼から、解放されていた」とありますが、どういうことですか。

1 三年という歳月の中でかつての「不在」という父の存在感がよびさまされ、死別の悲しみが自然と消えていったこと

2 父のいない三年の歳月になって、常に悲しみや不安がつきまとった父の思い出がいつのまにかあたたかいものに変わっていたこと

3 三年という歳月の中でいつのまにか父の不在を受け止めて、父を追い求める自分を乗りこえられるようになっていったこと

4 三年の歳月を経て父への尊敬の念が強くなり、父にならっておだやかな晩年をむかえたいと考えるようになっていったこと

問十四 父の「背中」が「私」にとってどのようなものであるかをおさえながら、この文章を読んだあなたの感想を百八十字以内で書きなさい。

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

①絵本は本という空間のなかで、絵と文章、すなわちイラストレーションとテキストを用いて、何らかの情報を読者に効果的に伝達するものです。名作といわれている絵本は、この両者の関係がたいへんうまくいっている場合が多いのです。これらイラストレーションとテキストの関係は、例えば、映画の映像（登場者たちの動き）と、同時に（その背景に）流れる音（役者の声や効果音など）との関係に似ています。つまり、映画を観る人は、動く映像を見、同時に役者の声や効果音を聞いて楽しむのです。映像と音を同時に楽しむのが映画の特性だとい

問一

てもいいでしょう。アニメーションの伝達手段も似ています。視聴者は連続して動く絵と声優の声や効果音を同時に楽しみながらアニメを見るわけです。

問二

（注）

②ところが、絵本はこれらの表現媒体と決定的にちがうところがあります。例えば、映画やアニメは、見る側がただじっとすわって見て聞いていれば、どんどん映像と音が勝手に先に流れていきます。ある意味では、受け身でいても楽しめるものです。受動的とも消極的ともいえますが、じっとしていても楽しめるのが映画やアニメの世界です。

③一方、絵本はじっとすわっていても楽しむことができません。だれかが手で「めくる」という動作が必要です。「めくる」ということがあってはじめて、絵本は伝達することが可能になります。この積極的な行為が必要であることが、絵本が他の表現媒体と決定的にちがうところでは、絵本は読者が自ら積極的に参加しないと楽しむことのできない鑑賞媒体なのです。ですから、「めくる」という動作が必要である」ということが絵本の第一の特性であるといえるでしょう。

④また、映画やアニメが一方的に流れていき、観客が受け身で見る（聞く）のに対して、絵本は読み手がめくりますから、読み手は自分の好きな間をとって見ていくことが可能です。内容がわからなければ、後もどりして、ときにはくり返して、その部分を見ることもできます。子ども読者のなかには、数ページ先をこっそり見て、それから元にもどって楽しむ子どもさえいます。このように、読者が自分のペースで楽しめる、すなわち、読者自らが「自分で間の置き方を決められる」ということが、絵本の第二の特性です。

⑤近年、機械化・情報化が進み、生活が便利になり、世の中はどんどん発展してよくなっているようにみえます。しかし、快適さの一方で、人間の心はますますさんでいくように思えます。物騒な事件や、以前には考えられなかったような不可解な事故も続発しています。政治も経済も不安な方向へ向かっているようです。

⑥このような世の中の全体的な劣化と、子どもが育つ幼少期の環境が無関係であるはずがありません。例えば、子どもがおいしいという食べものでも栄養がなかったり、逆に不必要なカロリーが多すぎたり、食品添加物が異常に多かったりなど心配は絶えません。学校教育の貧困さ、いじめの陰湿さなどは、史上最悪かもしれません。どんなに生活が便利になろうと、このような状況では、文化が向上・発展しているなどとは決まていません。もちろん世の中が悪くなるには複合的なさまざまな要因があると思います。しかし、現代の幼少期の子どもを取りまく環境が悪いということは深刻に受けとめるべき問題です。本来、この時期には、もっと人と人との直接のふれあいが必要です。人格の基礎が作られるのはまさに幼い時期なのですから。豊かな人生を生きるため、私たちはもっと真剣に子どもの環境を整えてやるべきです。

⑦赤ん坊や幼児が、この大切な時期にいつもテレビやビデオばかりを受け身で見せられていては、あたたかい人間関係を築けるはずがありません。やはり親しい大人がそばにいて、ゆっくり時間と手間をかけ、愛情こめて相手をしてこそ子どもは自然に健全に育つのだと思います。そのような意味で、問五絵本は大人と子どもの間にあって、豊かなものを与えてくれる重要な存在の一つです。

⑧しかし絵本を与えれば、子どもがみんな感性豊かに育つわけではありません。また絵本であればどんな絵本でもよいというわけにもいきません。心をこめて作られた芸術性の高い絵本を大人が選んで、ふさわしい与え方をし、また読者が幼い子どもであれば、大人がきちんと読んでやる必要があります。それは大人の大きな責任ですし、また大人の喜びでもあるのです。

⑨さて本題にもどりますが、絵本の第一の特性は「めくる動作が必要であること」といいました。ですから絵本表現を成功させるためには、問六作り手は読者がめくって楽しめるように作る必要があります。絵本をめくるとは、簡潔にいいますと、次のページを開くと何かが広がるということです。それが物語絵本であれば、めくると話が

進展する、何かが変化するということです。また別ないい方をすれば、次のページを開くと、ことばと絵がそれまでとはちがった役割を演ずるということです。あたりまえのようですが、このように作るには複雑な表現技術が必要とします。めくる動作に合わせた作話と絵作りが絵本の善し悪しを左右するポイントなのです。そして、読み手がめくる動作の意味を知っていれば、作者の意図をより理解して読んでやることのできるのですが、私が多くの方々と話した経験からいうと、このような絵本の決まりが意外と知られていないようです。

（藤本朝巳『そうくんはどっちを向いている？ 楽しい絵本学』）

〈注〉媒体：なかだちとなるもの

問一 ――部「映像と音を同時に楽しむのが映画の特性だといってもいいでしょう」とありますが、映画とよく似ている絵本の特性は何ですか。

問二 ――部「絵本はこれらの表現媒体と決定的にちがうところがあります」とありますが、どのようなところがちがうのですか。二つあげ、本文中の言葉を用いてそれぞれ二十字以内で書きなさい。

問三 筆者の考える現代の社会のよい点と悪い点を二十字以内で書きなさい。

問四 ――部「子どもが育つ幼少期」とは具体的にどんな時期ですか。本文中の言葉を用いて十五字以内で書きなさい。

問五 ――部「絵本は大人と子どもの間にあって、豊かなものを与えてくれる重要な存在の一つです」とありますが、なぜですか。三十字以内で書きなさい。

問六 ――部「作り手は読者がめくって楽しめるように作る必要があります」について答えなさい。

① 「めくって楽しめる」絵本にはどのような条件がありますか。二十字以内でぬき出しなさい。

② そのためにはどのように作ればよいのですか。本文中の言葉を用いて二十字以内で書きなさい。

問七 本文を大きく三つの内容に分け、二つ目の内容にあたる最初と最後の段落の番号を書きなさい。

問八 絵本とはどのようなものですか。本文の内容をおさえて百字以内で書きなさい。

「三」 次の――部1～5のカタカナの部分で漢字で書きなさい。また、――部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

1 手をあげる 2 船をツクる 3 タイリヨウを祝う 4 キテキが聞こえる

5 本をシャクヨウする 6 口実を設ける 7 身を粉にしてはたらく 8 親切な計らい

ここは余白です。